



心のどこかにしっかりと根づいているふるさとの風景。なつかしい思い出を写真でたどります。

▶昭和24年 稚児衣装を着た子どもたち（杉野）



## お寺の鐘がもう一度造られた 〜終戦後の混乱のなかで〜

白粉おしろいで可愛らしく化粧してもらい、きらびやかな稚児衣装を着た子どもたちが神妙に並んでいます。男の子は小学校の低学年、女の子は中学生までくらいでしょうか。学年の少し上の男の子は学校へ行く時の一張羅しやうらのようです。

昭和24（1949）年10月に梵鐘が新たに鑄造され、落慶法要が営まれました。お寺は正行寺といい、杉野にあります。

戦争中の物のなかつた時代、政府は戦争を遂行するために、さまざまな物の供出を求めました。米をはじめとする農産物、海産物、木材、鉱産物、などなど。そして、ついには昭和17（1942）年にはお寺の仏具や梵鐘まで供出の対象になりました。東京でこの年の11月には150の梵鐘と500の半鐘が一斉に供出されるということが報じられました。

全国津々浦々のお寺の梵鐘や半鐘が供出されていきました。正行寺も梵鐘はなくなり、代わりに大きな石が鐘楼に吊り下げられました。

昭和20（1945）年8月、戦争は終わりました。しかし、何百万もの人が亡くなり、町という町は焼け野原になり、農漁村も人手不足と資材不足で荒れ果て、その日の食べ物さえない人々があふれて、農村でさえ腹いっぱい食べることができないありさまでした。

そんななかではあったけれど、人々は新しい時代に希望を持っていました。

新しい憲法ができ、「平和」「民主主義」「男女同権」などという言葉が人々の口から聞こえてきました。がんばって力を合わせて働けばきっと良い時代が来ると信じていました。戦争中に供出してなくなった梵鐘をもう一度鑄造する事業もその一つの証しではないかと思えます。

日々の生活さえ十分でないなかで、暮らしに直接かわりのない梵鐘を新しく造ろうとするには、人々の元氣さというか未来に対する希望がなくてはできないことです。

杉野の正行寺も区内の人々が相談し、お金を出し合い、まわりの人々にも協力してもらい、鐘楼に新しい梵鐘をかけることができました。そんな喜びの日の一枚です。

梵鐘を再鑄する事業は、お寺によつては早くも昭和22年に始まり、だいたい昭和25年までくらいを一区切りとするようです。どこかのくず鉄置き場などに打ち捨てられていた梵鐘を運良く探し出したお寺もあったようですが、そんな幸運に恵まれたお寺はたくさんありませんでした。

戦後60年の年、思いを新たに

文・写真 伊藤保明

古い写真の情報を池田町役場まちづくり推進室までご連絡ください。

☎45・3111

協力 郷土史の会